

アーサー王の「転倒」

—ヴィクトリア時代以降の「神話」の大衆化に関する一考察—

The “Fall” of King Arthur : A Myth Popularised in the Victorian and Neo-Victorian Times

清川 祥恵

Sachie KIYOKAWA

Ⅰ 序—近代以降の「神話」と「神話学」

「神話」という語には、個々の地域・時代ごとに多様な定義が与えられており、統一的に定義しようとする事それ自体が論争的な行為である。「神話」を対象とする学問である「神話学」についても、とりわけ日本においては、明治期の「神話」概念輸入にさいして大きな影響をおよぼしたマックス・ミュラー (Friedrich Max Müller, 1823-1900) の比較神話学が依然として中心となっている¹。一方で、英語圏では心理学・文学・科学・人類学等の各分野への分節化が深刻であり、これを克服し、「神話学」について総体的に再考しようとする動きが 20 世紀後半から現れている²。本研究は、こうした流れをふまえたうえで、現代の「神話」の役割と、その大衆化の歴史的背景にかんして、英文学という分野における一考察を試みるものである。

したがってはじめに、本研究の射程での「神話」概念の概略について確認しておきたい。日本語の「神話」に直接対応する語として、“myth”と“mythology”がある。『オックスフォード英語辞典』(Oxford English Dictionary)によれば、“myth”とは「自然現象・歴史的対象に関する一般的な考え (some popular idea) を具体化した、超自然的な人物・行動・出

¹ 日本における「神話」概念の輸入・使用については、近年の研究では平藤喜久子『神話学と日本の神々』(弘文堂、2004年)にくわしい。

² 宗教学者のロバート・シーガル (Robert Segal) は、「神話」そのもののみで成立する理論はないと指摘し、科学、心理学、文学といったさまざまな学問分野に分けて、「神話」研究史の整理を行なっている (1)。フェルドマンおよびリチャードソンは、『近代神話学の起源』の編纂動機について、「初期近代の神話学の研究を再開するための主要な理由のいくつかは、現在の神話研究が不運にも分裂していることを認識したことに端を発する」

(Feldman and Richardson, xix-xx、以下特記のないかぎり英語文献からの引用は引用者訳) と述べている。

来事をともなう純然たる架空の物語 (purely fictitious narrative)」であるものの、他の「架空」の文学ジャンルとの形式上の厳密な区分は規定されていない。“mythology”も同様に、「伝説」を意味する“parable”, “allegory”と同義とされているのみである³。実際に、意図的に「神話」を「伝説」と同一視した用例も散見される⁴。

ここでキーワードとなっている「架空性」は、たんに歴史的事実から乖離しているということの意味するものではない。むしろミルチャ・エリアーデ (Mircea Eliade, 1907-86) が『神話の系譜学』で述べているように⁵、いったんは「未開人」の「非現実的な」物語とみなされた「神話」も、とりわけ 19 世紀以降「異文化」にたいする理解が深まってゆく過程で、他者 (=「未開人」) のものであるからといって「非現実」の物語ではなく、彼らにとっては「真実」なのだとして認識されるようになった。また、英文学者のノースロップ・フライ (Northrop Frye) は、「どんな人間社会も何らかの言語文化を所有していると想定してよいが、フィクションつまり物語は、そのなかで際立った地位を占めている」とし、聖書という狭義の「神についての物語」のみならず、世俗的架空文学の中でもダンテやミルトンのような詩人の作品は、「たとえ聖書から一段階距たっていたとしても、真実 (be real) と見なされた」、「たんに真実であるだけでなく、読者にもっとも深く関係する事柄と見なされた」ものであるとした⁶。すくなくとも近代以降の「神話」は、実際に信仰の対象となる神性を帯びたキャラクターが登場するか否かによってではなく、社会との関わりによって「真実」と認められた「フィクション」であり、こうした架空の物語が社会を結びつけ歴史的連続性を保つという性質を、フライはさらに端的に「引用の共有遺産」(shared heritage of allusion) と表現し、「神話」を文化的源泉として評価している⁷。

したがって、「神話」の包括的な定義自体がかなりの困難性を有していることは疑いがな

³ “myth”, “mythology” in *Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989

⁴ 18 世紀にはエイモス・コットル (Amos S. Cottle, 1766-1800) が「私は myth ということばを、通常それによく付与されている意味、つまりある神性を自然の力的人格化だと考える意味ではなく、legend や fable といった意味でつかう」(*Icelandic Poetry, or The Edda of Saemund* 8) としており、「神性」(divinity) を問題としない「神話」の用例といえる。比較神話学等で一般的に使用される、「神話」・「伝説」・「昔話」を「真偽」・「時間」・「場所」・「性格」・「主人公」の各要素——すなわち、歴史的事実を記述しているか、まったく架空の内容なのか——で区別するような分類方法 (Cf. 吉田敦彦・松村一男, 13 頁) は、このように英語圏において「架空性」を「真実」と結びつける動きとは対照的といえる。

⁵ 『『未開の』つまり太古的社会についてのわれわれの理解が深まるにつれて、神話の新しい意味が明らかになってきた。『未開人』にとり、われわれが『神話』と呼ぶもの [……] は、「真実の物語」であり、しかも聖にして、模範的で、有意味な物語である。[……] 今日では『神話』という後は、『作り話』または『幻想』という古い意味と、『聖なる伝承、最初の啓示、範型』という意味との両方に用いられている。」(ミルチャ・エリアーデ「十九・二十世紀における神話——神話の宗教的価値と論理的構造を求めて」、P・シュールほか編著『神話の系譜学』野町啓ほか訳、160-211 頁、162 頁)

⁶ フライ『世俗の聖典——ロマンスの構造』中村健二・真野泰訳、5-6 頁。

⁷ 「[……] 神話は特定の文化に根を下ろすが、神話独自の観点から文化にその本質と成立の由来を教えることが神話の役割の一つである。このようにして神話は共有された引用の遺産 (legacy of shared allusion) を文化に伝える。」「しかし文学が発展するにつれ、『世俗的』物語も文化に根を下ろし、引用の共有遺産に貢献し始める。」(中村・真野訳、8 頁、下線引用者)

いが、近代以降、とくに 19 世紀以後においては、「読者」の拡大に鑑み、「神話」における「架空性」が前景化しているという特徴が指摘できるだろう。つまり異文化の神話（あるいは世俗化された自文化の神話）を大衆が「消費」するようになった現代において、その「神話」の「真実」は、いかにして、そして誰にとって「真実」たり得、社会においてどのような意味を持ちうるのかという議論である。

そこで本研究では、異文化間の神話の構造的共通性や影響関係、神話の起源ではなく、「架空」の物語の社会的機能に着目する。「史実」から自由でありながら「あるべき現実」を語るという性質が、19 世紀にどのように意識化されたのか。また、現在にいたるまで「フィクション」——すなわち広義の「神話」として再生産されつづけることで、どのような「遺産」が「共有」されているのか、以下に例証してゆきたい。

II 19 世紀英国における「神話」

英国では、15 世紀にウィリアム・カクストン (William Caxton, c.1422-1491) によってすでに、ウォラギネ (Jacobus de Varagine, c.1230-1298) の『黄金伝説』(*Legenda Aurea*) といった聖人伝や「古典」であるギリシャ・ローマ神などの伝承文学が英訳し出版されていたが⁸、近代以降は帝国主義的膨張によって拡大される版図のなかに無数に存在する神話体系がこれらを相対化する形で加わり、「神話」の世俗化と、世俗の物語の神話化が並行してすすむこととなった。フェルドマンおよびリチャードソンは『近代神話学の起源——1680 年から 1860 年』(*Rise of Modern Mythology, 1680-1860*, 1972) で、この流れを次のように分析している。

1700 年頃、「神話」という語は主に継承されてきた神話体系、もっぱらギリシャ・ローマ神話を指していた。しかし徐々に、インド神話、北方神話、アフリカ神話、それどころか古今すべての神話へと拡大していったのである。[……] そして 19 世紀前半に次第に、[……] 神話は 2 つの意味を追加して帯びるようになった。神話は芸術や文学を通じて表現される創造の過程 (a creative process)、想像の様式 (a mode of the imagination) として考えられるようになった。[……] もはや異教のものであるから偽りだとして単に貶められることはなく、神話はすべての宗教の内にある活気を与える力の源 (the inner vivifying principle) と理解されることになり、そしてその内在的な生命は、おそらくルネサンス以来はじめて、幸いにも再び芸術にとって利用可能になったのである。(Feldman and Richardson, xxi; 下線引用者)

⁸ カクストンはこれらの出版のほか、古典から俗語文学に文化がひきつがれる一つの大きな契機となった、英語で書かれた物語であるジェフリー・チョーサー (Geoffrey Chaucer, c.1343-1400) の『カンタベリ物語』(*The Canterbury Tales*) の出版でも知られる (1476 年)。印刷術の草創期には当然「古典古代のギリシアやローマの作家たちの偉大な作品が手に入りやすくなる」ことが期待されていたのだが、「民衆の言葉」たる俗語文学の広まりにも一役買った (ペディグリー『印刷という革命』桑木野訳、258-59 頁)。

近代以降ヨーロッパにおいて各地の伝承が俗語でも共有され、さらには文化的同質性を持たない地域の神話も「異教」（および否定的な意味での「架空」）という言葉によっておとしめられることがなくなった。同時に、ヨーロッパで上位のテキストとして扱われていたギリシャ・ローマ神話も、一地方の伝承として位置づける見方が徐々に現れはじめる。

例として、チャールズ・キングズリー（Charles Kingsley, 1819-75）の『英雄、すなわち我が子らのためのギリシャのおとぎ話』（*The Heroes; or, Greek Fairy Tales for my Children*, 1856）の序文を見てみよう。

さて、彼ら〔古代ギリシャ人〕は若く純朴なころ、君らのように、おとぎ話 (fairy tale) を愛していた。すべての民族は、若い時分には愛するものだ。我々の祖先が愛し、そして自分たちの物語を「サガ」(Sagas) と呼んだように。私はいつか、君たちにそのうちのいくつかを読んであげよう——『エッダ』(the Eddas)、『巫女の預言』(Voluspá)、そして『ベオウルフ』(Beowulf)、それから高貴な古いロマンス (the noble old Romances) を。昔のアラブ人たちもまた、彼らの物語を持っていて、それはいま我々が呼ぶところの『アラビアン・ナイト』(The Arabian Nights) だ。古代ローマ人たちも彼らの物語を持っていて、彼らはそれを “fābulae” と呼ぶ。そこから我々の “fable” [伝説・神話] という言葉はきている。古代ギリシャ人 (the old Hellens) たちは彼らの物語を “Muthoi” と呼び、そこから我々の新しい「神話」(myth) という言葉をとった。しかしそれらの、キリスト教中世に書かれた古いロマンスの後に、こうした古代ギリシャのおとぎ話のように、美、知恵、真実、子供達が高貴な行ない (noble deeds) を愛するようにすること、彼らを救う神への信仰について書いたものは、まったくなかったのだ。 (20-21)

タイトルでもすでに英雄伝説とおとぎ話が同一視されており、文中でも、既述した今日の定義と同様に、“fable”や “myth”の厳密な違いは意識されていない。むしろこの二つは「古代ローマ人」と「古代ギリシャ人」⁹が、それぞれ祖先からつたわる「物語」一般を呼ぶさいの名称であり、言語の違いにすぎないとされている¹⁰。また古代ギリシャのおとぎ話が中世ロマンス——つまり、カクストンが英訳し出版したような騎士物語など——とジャンル上の連続性を有していることも注目し得る。またキングズリーはギリシャの「おとぎ話」には、下線部のように、時代を超えて継承される道徳的価値観・社会規範が含まれていると考え、「ギリシャ・ローマ」地域（圏）の文化の固有の物語としてのみならず、「恩寵」

⁹ キングズリーは「ギリシャ人」Greeks というのは誤った呼び名であるとし、彼ら自身の呼称として「ヘレン人」Hellens を用いている。

¹⁰ なお今日、「ギリシャ神話」の「史実性」を再考しようとする研究については、Albert Henrichs, “Demythologizing the Past, Mythicizing the Present: Myth, History, and the Supernatural at the Dawn of the Hellenistic Period” (in *From Myth to Reason?: Studies in the Development of Greek Thought*, ed. by Richard Buxton, Oxford: Oxford UP, 1999, 223-48) があり、ここでは “myth” と “history” というギリシャ語に由来する二つの言葉が現在真逆の意味に使われていることに関し、20世紀後半以降、“myth”が本来有している “history”の類義語としての性質が見直されつつあることが指摘されている。

としての知を与えられた人々の物語として礼賛しているということがわかる。中世ロマンス以降途絶えてしまった、古来の美德をしのいだ文学が今日につたえるものは、単なる架空の「おはなし」ではなく、以下のように膨大な知的伝統である。

君らは、ギリシャの名前、単語、格言をふくまない著作で、見事といえるようなものは、ほとんど見いだせないだろう。君らはギリシャの建物の前を通ることなしに、大都市を通り抜けることはできない。ギリシャの彫像や装飾、ひいてはギリシャ様式の家具や壁紙を目にすることなしに、良くしつらえられた部屋に入ることはできない。奇妙なことに、我々がいま生きているこの現代世界に、これらの古代ギリシャの人々はそのしるしをのこしている。そして君が大人になるにつれ、そしてより多くの読書をするにつれ、君は発見するだろう——すべての数学や幾何学のはじまりはこれらのギリシャ人のおかげなのだ、と。つまり、数、物事の姿、物事を動かしたり制止させたりする力といったものの学問と知識。地理学と天文学のはじまり、法律、自由、そして政治のはじまり。つまり、どのように国を統治し、それを平和で強固にする学問。そして我々の論理のはじまりもまた、彼らのおかげである。すなわち、言葉と推論、そして形而上学の研究である。それは、我々の思想と精神の研究である。そして最後に、彼らは彼らの言語を非常に美しくしたので、外国人達はそれを自分自身のことばの代わりにつかうようになった。そしてついにギリシャ語は、[……] 世界中の教育を受けた人々の共通語となった。そしてそれゆえに、「新約聖書」はギリシャ語で書かれ、ローマ帝国のすべての民族に読まれ、理解されたのだ。(9-11)

古代ギリシャの伝統は英国の文化にも根を下ろしており、血脈的起源ではなく、文化的伝統の源泉として“myth”が存在し、そこから知的存在としての自己に脈々と受け継がれる「歴史」がはじまっているのだという理解である。この「歴史」の正統性を保証するために、キングズリーにとって英国人の重要なアイデンティティであるキリスト教信仰との関連づけが行なわれている。

またこの著作が「子どもたち」を対象としていることからわかるように、ひろく「一般大衆」の読み物としての神話の編纂・再話が、19世紀には目立つようになる。「異民族」の「神話」のなかにこそ「真の」道徳規範・価値体系があるという読み替え、すなわち「神話」を「あるべき我々の歴史」として読む作業は、こののちさらに盛んとなり、20世紀半ばまでには強引な『民族』固有の物語」収集とその神話化として影を落とすことになる。次章ではこうした「自文化」化と「大衆化」の動きについて、事例を挙げて検討する。

III 「神話」の大衆化

「ギリシャ神話」と同様、英国においてひろく大衆に親しまれることとなるテキストのひとつが、アーサー王伝説である。その起源はイングランドではなくケルト文化に求められることはしばしば指摘されるものの、詳しい成立過程については不明な点が多い。しかし、12世紀にグラストンベリのアーサー王の墓が「発見」され、以後2世紀でま

った伝説が形成されたことは確実視されている¹¹。トマス・マロリー (Sir Thomas Malory, c.1405-71) の『アーサー王の死』 (*Le Morte D'Arthur*) はその後成立した代表的なテキストである¹²。

18世紀になると、ナショナリズムの高まりとともに好古趣味が流行し、廃墟の美的価値へ注目があつまった。そして19世紀には、中世のテキストの「再発見」が行なわれ、ロバート・サウジー (Robert Southey, 1774-1843) 版の『アーサー王の死』 (1817) が出版された。さらに1850年代には、アルフレッド・テニスン (Alfred, Lord Tennyson, 1809-92) による『王の歌』 (*Idylls of the King*, 1834-85)、マシュー・アーノルド (Matthew Arnold, 1822-88) の『トリストラムとイゼールト』 (*Tristram and Iseult*, 1852)、ウィリアム・モリス (William Morris, 1834-96) の『グウィネヴィアの弁明』 (*The Defence of Guenevere*, 1858) が相次いで出版されるなど、「アーサー王復興」 (Arthurian Revival) と呼ばれる文化現象がおこっている¹³。中世を「再発見」し、「近代」の諸悪と対比して理想化する中世主義の動きは、同時代人の模範としての騎士道 (chivalry = gentlemanship) の復権、信仰心をかき立てるモチーフとしての聖杯探求、理想的王室像の投影などによって、「英国性」 (Englishness もしくは Britishness) を確立することへとつながっていったのである¹⁴。

キングズリーはギリシャ神話を「伝統」すなわち教養の源泉とみなしたが、アーサー王伝説は同時期に、騎士道と結びつくことによって、より包括的・実践的な行動規範として読まれるようになり、その波は英国にとどまらず、ヴィクトリア時代のもうひとつのアングロサクソン世界、すなわちアメリカにも及んだ。アーサー王伝説における価値規範について1835年にギリシャ神話との直接的な対比を行なったのが、ラルフ・ウォルドー・エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-82) で、エマソンは「ロマンスは娯楽を目的としているが、しばしば (もしくは常に) 道徳を含んでいる」と述べ、テニスンは昔の伝説からこうした道徳の要素をうまく抽出したために、ホメロスやアリストパネス、ダンテと比肩する「アーサー王の国民詩人」になったのだと主張した¹⁵。アメリカにおいて、アーサー王の「国民的英雄」としての性格は、ひろく「アングロサクソン」の共通の理想へと拡大され、共有されていったのである¹⁶。前掲の『近代神話学の起源』で、もう一人の主要な「神話」

¹¹ Cf. Guerber, 273. なお、リトルトンとマルカーによる『アーサー王伝説の起源』では、アーサー王の原型と「スキタイ人」との関連が考察されている。

¹² マロリーの『アーサー王の死』に見る政治性の分析に関しては Elizabeth T. Pochoda, *Arthurian Propaganda: Le Morte Darthur as an Historical Ideal of Life* (Chapel Hill: The U of North Carolina P, 1971)などの既往研究がある。

¹³ See James Douglas Merriman, *The Flower of Kings: A Study of the Arthurian Legend in England between 1485 and 1835*, Lawrence: UP of Kansas, 1973.

¹⁴ See Elizabeth Fay, *Romantic Medievalism: History and the Romantic Literary Ideal*, Hampshire: Palgrave, 2002, 64-108.

¹⁵ Taylor and Brewer, 165.

¹⁶ 今日の民主主義が実際にアングロサクソンの人々に由来しているとは言えないにしても、自由や民主主義などのアメリカ人にとってとりわけ重要なイデオロギーの起源をアングロサクソンに求める者もいる (Detweiler, 185)。また、シドニー・ラニア (Sydney Lanier, 1842-81) は、アメリカの歴史的な文脈をふまえて、南北戦争の敗者である南部の騎士道精神をアーサー王伝説に関連づけて理想化した (Taylor and Brewer, 164)。

の紹介者として取りあげられたトマス・ブルフィンチ (Thomas Bulfinch, 1796-1867)¹⁷も、『騎士道時代』 (*The Age of Chivalry*, 1858) の序文でつぎのように述べている。

最後にはいかに情慾や我意に晦まされていても、人間の心の中には生れながら宿っている正義感と寛大の中に、その抑制力は見出されたのであった。この最後の原因から騎士道は起ったので、無敵の力量、勇気、正義、謙譲、長上に対する忠誠、同輩への礼節、弱者への憐憫、教会への献身等の諸徳を具備する英雄的な性格の理想 (an ideal of the heroic character) を造り上げた。それはよしんば現実生活においては到達されないとしても、なお以って学ぶべき最高の典型 (an ideal which, if never meet with in real life, was acknowledged by all as the highest model for emulation) としてみな人に承認されていた理想であった。

(『中世騎士物語』 野上弥生子訳、14頁；下線および原文の補足は引用者による)

ブルフィンチの高祖父 (1660年生) は、商人としてイングランドからボストンに移住し、曾祖父・祖父はともに医師、父は建築家となった (Crawford, 203)。本人も 1814年にハーヴァード大学を卒業後したが、その後実業界での失敗を経て、『伝説の時代』 (*The Age of Fable*, 1855)、『騎士道時代』、『シャルルマーニュの伝説、すなわち中世のロマンス』 (*Legends of Charlemagne, or Romance of the Middle Ages*, 1863) といった神話・伝説に関する書物を発表する。イングランドの文化を共有しているブルフィンチは、キングズリーと同様に、中世騎士を模範として礼賛した。また、これら神話・伝説に関する書物の対象とする読者についても、つぎのように述べている。

我々の著作は学者 (the learned) や神学者、哲学者のためのものではない。演説家や講師、評論家、詩人によって非常にしばしばなされたり、儀礼的な会話に見られたりする引用 (allusions) を理解したいと願う、いずれの性別であるかを問わぬ、すべての英文学の読者のためのもの (for the reader of English literature, of either sex) である。¹⁸

ノースロップ・フライが指摘した「引用の共有遺産」としての「神話」の性質は、このブルフィンチの理解のなかにも明確に認められる。また、子ども向けの神話を編纂したキン

17 『近代神話学の起源』によると、すくなくとも英語圏において大衆の神話の知識に貢献した主要な作家はナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne, 1804-64)、キングズリー、ブルフィンチである。彼らはギリシャ神話をヴィクトリア時代の上品な (genteel) 主題に書き換え、説明する (explain) というよりは再び語り直す (renarrate) ことを引き受け、「同じ時期にグリム兄弟がおとぎ話を神話と同様にまじめなものとして取り扱っていたとき、彼らは神話を古代ギリシャのおとぎ話と同じように、魅力とナンセンスにあふれたものとして扱った」 (Feldman and Richardson, 505-06)。

18 Thomas Bulfinch, Author's preface vii-viii in *Bulfinch's Mythology: The Age of Fable; The Age of Chivalry; Legends of Charlemagne*.

グズリーと同様、ここでも専門家ではない人、高等教育をうけていない人も含めた一般読者、言い換えれば「大衆」に向けた発言が行なわれている。ヴィクトリア時代においてアーサー王は、「イングランド人」、「英国人」のみならずひろく「英語圏」の読者のアイコンとして神格化された。それは「中世」の「再発見」を端緒とし、理想の家族・庶民の模範としての王室のイメージ戦略や、こうした価値を啓蒙するための大衆向けの再話によって、英語のなかに蓄積されてきた文化的伝統として、一般大衆に徐々に浸透したのである。

IV 21世紀の事例：ネオ・ヴィクトリアン映画としての『キングスマン』

このように、「神話」を相対化し、再想像／創造したヴィクトリア時代を経て、大衆化したアーサー王伝説は今日さらにどのように再々想像／創造されてゆくのか。通覧は困難だが、21世紀の「ネオ・ヴィクトリアン」映画として『キングスマン』(*Kingsman: The Secret Service*, 2014)を取りあげ、19世紀に大衆の理想像となったアーサー王が、さらに拡大した不特定の大衆を受け手とする「ハリウッド映画」の題材となった結果生じた変化について、以下に検討してみたい¹⁹。

なお、アーサー王伝説の映画化作品自体は無数に存在している。『キングスマン』の近傍の作品への評価のみ確認しておけば、1995年に制作された『トゥルー・ナイト』(*First Knight*)は浮薄なロマンスとしての評価が目立つが、近年になって当時のクリントン政権下で模索された冷戦後のリーダー像と重ね合わせる意欲的な論考も発表されている²⁰。その約10年後の作品である『キング・アーサー』(*King Arthur*, 2004)は、20世紀後半につよく意識されるようになった、「英国性」脱構築——すなわち作為的に統合された「英国人」の解体という観点から²¹、アーサー王と騎士たちの「非英国的」側面や英国内の文化的多様性が強調されている点が新しい²²。

¹⁹ 『ネオ・ヴィクトリアン研究』(<http://www.neovictorianstudies.com>)によれば、「ネオ・ヴィクトリアン」とは「英国および国際的枠組における、19世紀の『再想像』(re-imagining)と、それにとまなう様々な文学的、芸術的、社会・政治的、歴史的背景への今日的な強い関心」と定義される。

²⁰ Aronstein, “Revisiting the Round Table: Arthur’s American Dream” in *Hollywood Knights: Arthurian Cinema and the Politics of Nostalgia* 191-214. たとえば、ランスロット役のギアが『アメリカン・ジゴロ』(*American Gigolo*, 1980)のタイトルロールのイメージをひきずっていることが、批判をうける一因となっていた (Aronstein, 197)。

²¹ See Linda Colley, *Britons: Forging the Nation 1707-1837*, New Haven: Yale UP, 1992, 2nd ed., 2005.

²² 「[……] 二十世紀には、アーサー王の歴史の実像を取り戻そうという動きが顕著になってくる。[……] 続々と出土する反証を無視して、アーサー王の『イングリッシュ』性を主張することはだんだん難しくなった。さらに、ウェールズ民族主義運動がふたたび活発化するにいたったことも、新しい『よりケルト的な』アーサー王像の必要性を促したといえる」(バーチェフスキー『大英帝国の伝説』野崎嘉信・山本洋訳、330頁)。具体的には、『キング・アーサー』においてアーサーは、ローマの貴族に捕らえられていたグウィネヴィアを救出するシーンで「私はローマの将官だ」(“I’m a Roman officer”)と名乗るものの「ローマ人」ではなく、ケルトの一部族であるウォード(Woad)の民を「異教徒」(pagans)とのしり不服従を理由に奴隷(serf)として処刑しようとする貴族に対して憤りを隠さない。またキリスト教の神について「自らの神ではない」とはっきりと否定する麾下もおり、

映画『キングスマン』は、『キング・アーサー』のさらに約10年後に、スパイ・エージェント組織を題材としたアメリカン・コミックの原作に、アーサー王伝説の要素をつけくわえて制作された²³。あるきっかけから、より良い社会と平和のために活動する国際諜報組織キングスマン (Kingsman) に関わることになった非行少年エグジー (Eggsy) が、地球規模での人口の「間引き」をたくらむ悪人に立ち向かう物語である。キングスマンのエージェントたちは、アーサー王と円卓の騎士たちの名をコードネームとして名乗っている。21世紀において、この「騎士団」はどのような姿で描かれているのだろうか。

コリン・ファース (Colin Firth) 演じるハリー (Harry、コードネームは「ガラハッド」Galahad) は、エージェントを目指すことになるエグジーに、「スーツは現代のジェントルマンの鎧」 (“The suit is a modern gentleman's armour”) であり、「キングスマンは新たな騎士だ」 (“the Kingsman agents are the new knights”) と告げている。組織の本拠地はサヴィル・ロウ (Savile Row) にある仕立屋で、晴れてキングスマンの一員になったさいには、ここでスーツを仕立てることになる。主人公側の英国人俳優にきわめて「英国的」なスーツを身につけさせる一方で²⁴、わき役・悪役にアメリカ人の「ジェダイ」俳優を起用するなど²⁵、ジェントルマンらしさ (gentlemanship) と英国性の明白な関連づけがなされている。

エグジーは、死亡した「ランスロット」 (Lancelot) の後継としてキングスマンに加入する試験を受けることによって、普通の繁華街育ちの少年から徐々に成長していく。しかし、作中で『プリティウーマン』 (*Pretty Woman*, 1990) もしくは『マイ・フェア・レディ』 (*My Fair Lady*, 1964) によって例示される単純な社会階梯の「上昇」が描かれているわけではない。たしかに最後にはエグジーの身なりはテイラーメイドのスーツへと様変わりするのだが、入団試験に失敗し、あくまでも自らの流儀で生き抜こうとする姿には、一般的な「ジェントルマン」像に適応しようとする意志はうかがえない。こうしたエグジーの階級意識

アーサーはウォードの人々と手を携え、ローマの圧政とサクソン人の侵略に立ち向かうことになる。さらに同作ではランスロットにウェールズ出身のヨアン・グリフィズ (Ioan Gruffudd) を起用し、キーラ・ナイトリー (Keira Knightley) 演じるグウィネヴィアにもケルト風の入墨をほどこしており、バーチェフスキーの指摘にあるような傾向を踏襲している。

²³ 原作は、マーク・ミラー (Mark Millar) とデイヴ・ギボンズ (Dave Gibbons) により、2012年にマーヴェル・コミックス (Marvel Comics) 系列のアイコン・コミックス (Icon Comics) から出版された、*The Secret Service* である。この作品自体にはアーサー王伝説の要素は含まれていないが、超人的なヒーローをあつかうアメリカン・コミックと神話との親和性については、近年注目があつまっている。例として、1960年代に北欧神話の雷神トールを主人公とした作品 *Mighty Thor* があるが、これがナチス時代以降のゲルマン神話をタブー視する流れから脱する一助となったという指摘がある (Martin Arnold “Myth” in Emery and Utz eds., *Medievalism: Key Critical Terms*, 165-71, 171)。2000年前後のいわゆる「ファンタジー」ブームとともに、アメコミ作品の映画化が相次いだことは偶然の一致ではないだろう。

²⁴ アーサー (Arthur) はマイケル・ケイン (Michael Caine)、エグジーはウェールズ出身のタロン・エジャトン (Taron Egerton) が演じている。

²⁵ 悪役ヴァレンタイン (Valentine) をサミュエル・L・ジャクソン (Samuel L. Jackson)、悪人側に利用されすぐに退場する教授役をマーク・ハミル (Mark Hamill) を演じる。

は、ハリーの死後、アーサーから特別にブランデーをふるまわれる場面できっぱりと表明される。このブランデーは、仲間が殉死したときにエージェントたちがテーブル（円形ではないが、円卓会議を想起させる）に集って味わうものである。アーサーはスパイ道具のひとつである万年筆で、ひそかにエグジーの杯に毒を盛る。乾杯後の二人のやりとりを引用してみる。

〔それぞれが杯に口をつけたあと、アーサーが万年筆を掲げてみせる〕

アーサー：見当がつくかね、これが何か。

エグジー：その必要はないよ。ハリーが教えてくれたから。あんたがそれ〔＝毒を作動させるスイッチになっている万年筆のクリップ〕をカチッとやると、俺は死ぬ。ブランデー、くそみたいな味だったな (tasted a bit shit)。

アーサー：お見事。

〔中略、悪役の側に寝返らないかとアーサーが誘う〕

エグジー：俺はハリーの側にいるほうがいいや (I'd rather be with Harry)。どうも。

アーサー：ならば好きにしまえ (So be it)。

〔アーサーが毒を作動させると、エグジーではなく、アーサーに異変が起こる〕

エグジー：俺たち庶民の問題 (The problem with us common types) っつのは、手癖がわるい (light-fingered) っつことだよ。キングスマンはいろんなことを教えてくれたけど、早わざ (sleight of hand) は……

〔アーサーが視線をそらした隙にグラスを入れ替えるエグジーの回想〕

エグジー：俺が、もともとマスターしてたものだ。

アーサー：この汚ねえチンケなクソ野郎め…… (You dirty little fucking prick...)

ここでアーサーによってガラハッドのために掲げられるのは、「聖杯」どころか毒杯である。アーサーは悪人の口車に乗せられた裏切り者だった。エグジーは乾杯のまえにそれに気づき、グラスをすりかえて難を逃れる。エグジーは、キングスマンのようなエリートではない「俺たち庶民」²⁶の性質として「手癖のわるさ」を挙げ、自らの保身のために謀殺をいとわない、卑劣なアーサーに痛烈な皮肉を投げかける。この裏切り行為とアーサーの最期の台詞は、現代の騎士団すなわちジェントルマンの組織「キングスマン」のリーダーたるアーサーが、実際はなんら高潔さを持ち合わせていなかったということを決定づけるのである。この乾杯シーンでは、アーサーが一貫してハリーを「ガラハッド」というコードネームで呼ぶのに対し、エグジーは乾杯時を除いて本名で呼んでおり、エグジーにとってはキングスマンそのものは憧れではなく、ただ自らの可能性を信じ自らに道を示してくれたハリーに、敬愛の念を抱いていたことがわかる²⁷。そもそもエグジーが採用試験で唯一しくじ

²⁶ エグジーとハリーが「ジェントルマン」について語り合う場面で、エグジーは自分だけの「庶民」(pleb) にすぎないと述べるが、ハリーはジェントルマンとは生まれではなく学ぶことによってなれるものだと説明する。

²⁷ なお、ハリーにスパイの道具について説明してもらったシーンで、エグジーが好奇心からこの「手癖のわるさ」を発揮するシーンがあるが、ハリーには即座に見破られている。

ったのは殺すように言われた犬を殺せなかったという、まさに「ハリウwoods的」価値観を持っていたからだというのも、併せて興味深い点である。現代の「ジェントルマンシップ」は、もはやキングスマンが体現する階級にもとづく価値規範ではなくなったのである。

本作のもつ構造や、ここに見られる社会問題には、ヴィクトリア時代に意識化され、描かれてきたものも少なくない。たとえばまずしい母子家庭からの立身出世というビルドゥングスロマンの構造、マルサスの人口問題、集団ヒステリー、退廃的享楽主義（ある種の退化 *degeneration*）などである。これらに対し、19世紀に主張された「騎士道」という価値観そのものの有効性はいまだ信じられており、再び模範として提示されてはいる。ただしアーサー王が、神性や英雄性をまったく剥奪され、それどころか「王」の器量ですらない人物へと成り下がってしまったのは、必要なのはエスタブリッシュメントの出自ではないという強いメッセージである。ゆえに王妃グウィネヴィアは登場せず、従来の作品に必ずといっていいほど見られたアーサー、ランスロットとの宮廷的三角関係は描かれない²⁸。またキングスマンのエンブレムは横倒しの“K”を丸囲みした意匠で、「騎士団」の序列ではなく、平等性を感じさせるものとなっている。こうしたアーサー王の「転倒」に代表されるような変化は、21世紀において、これまで信じられてきた「神話」をどう解釈し、自らの模範として受け入れていくかという問題へのひとつの回答であると言えるだろう。

V 結論

神話学者のジョーゼフ・キャンベル（Joseph Campbell）は、『千の顔を持つ英雄』（*The Hero with a Thousand Faces*, 1949）のなかで、「現代に生きる人間の課題は、絶大な統合機能を持つ神話——現在では『作り話』とされる——が語られていた、相対的に安定した時代を生きた人間の課題とは正反対」（倉田・斎藤・関根訳、下巻、87頁）と断じ、現代社会が集団のなかでの価値観を喪失し、途方に暮れているとする。「我々」と「それ以外」の区分が多様化するなかで、キングスマンの組織ではなく個々人のなかに「ジェントルマンらしさ」を求めようとするのは、まさにキャンベルが看破した通りの現代の傾向なのかもしれない。

しかし重要なのは、それでもなお「神話」は語り直されるということである。むしろ、英雄たちの「人間らしさ」を強調して描くことで、自らの行動の指針としたいという願いは、いっそう高まってきているように見える。エグジーは、キングスマンとなることでアーサーのように生来の手癖のわるさを捨て去るのではなく、それを用いて正しく悪を挫くことに成功した。この点において、19世紀的な階級観からは脱した価値観を提供することができている。ただし同時に、「アーサー王伝説」をモチーフにすることによって、べつの根源的な問題が覆いかくされていることも事実である。たとえば全体を通じた「ジェントルマンは生まれで決まらない」という主張は、エグジーの父がそもそもキングスマンの一員であったことと矛盾する。そして「スーツ」に表象される英国性とジェントルマンシ

²⁸ 三角関係は宮廷愛（*courtly love*）とも呼ばれ、上流階級を象徴するロマンスの要素である。これを主題とした絵画として、ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ（Dante Gabriel Rossetti, 1828-82）の『アーサー王の墓』（*Arthur's Tomb*, 1855）が知られている。

ップをつよく結びつけることは、商業主義を背景としているにしても、別の意味で階級構造を付与してしまっている。

したがって、21世紀におけるヴィクトリア時代の「神話」の語り直しとしての成否や特徴は、他の同時代の作品も考慮したうえで評価する必要があるが、すくなくとも「神話」のある種の不変／普遍的性質は、『キングスマン』一作品においても十分に読み取れる。とりわけ映画というマスメディアを通して今後さらにどのような現代的価値観がアーサー像に付与され、またどのような批判が生まれてくるのか、継続的な検討をくわえることで、「神話」の架空性が社会において果たす役割を明らかにしていく必要があるだろう²⁹。

付記

本研究は研究員プロジェクト「近代『神話学』の発展と『神話』概念拡大の思想的背景の解明」として神戸大学国際文化学研究所の助成を受けたものである。また JSPS 科研費 26770100 の助成を受けたものである。

参考文献

書籍

- Aronstein, S. *Hollywood Knights: Arthurian Cinema and the Politics of Nostalgia*. New York: Palgrave, 2005. Print.
- Bulfinch, Thomas. *Bulfinch's Mythology: The Age of Fable; The Age of Chivalry; Legends of Charlemagne*. Revised ed., New York: Grosset, 1913. Print.
- Buxton, Richard, ed. *From Myth to Reason? : Studies in the Development of Greek Thought*. Oxford: Oxford UP, 1999. Print.
- Colley, Linda. *Britons: Forging the Nation 1707-1837*. New Haven: Yale UP, 1992, 2nd ed., 2005. Print.
- Cottle, Amos S. *Icelandic Poetry, or The Edda of Saemund*. Bristol, 1797. Print.
- Crawford, Mary Caroline. *Famous Families of Massachusetts*. vol. 2. Boston: Little, Brown and Company, 1930. Print.

²⁹ 『キングスマン』においては間接的なモチーフにとどまったが、2017年にはアーサー王伝説の新たな直接的映画化作品が公開予定である。2014年1月31日付のガーディアン紙の記事「ガイ・リッチーはアーサー王叙事詩に適した監督か？」では、リッチーの作風から「誰もアーサー王とランスロットがクラヴ・マガ〔20世紀にイスラエルで生まれた格闘術〕や UFC〔に代表されるような総合格闘術〕で大乱闘するのは見たくない」との危惧が呈されており、トールキン (J. R. R. Tolkien) の『指輪物語』(*The Lord of the Rings*) や『ホビット』(*The Hobbit*) の映像化を成功させたピーター・ジャクソン (Peter Jackson)、シェイクスピア俳優であり『ヘンリー五世』(*Henry V*, 1989) を監督したケネス・ブラナー (Kenneth Branagh)、『ホビット』にも関与したギレルモ・デル・トロ (Guillermo del Toro) らと適性が比較されている。このように「英国らしさ」とそれをふまえた「リアリティ」は、アーサー王伝説の映像化にとって非常に重要な要素である。

- Detweiler, F. G. "The Anglo-Saxon Myth in the United States" in *ASR* 3.2 (1938): 183–189. Web.
- Emery, Elizabeth, and Richard Utz, eds. *Medievalism: Key Critical Terms*. Cambridge: D. S. Brewer, 2014. Print.
- Fay, Elizabeth. *Romantic Medievalism: History and the Romantic Literary Ideal*. Hampshire: Palgrave, 2002. Print.
- Feldman, Burton, and Robert D. Richardson. *The Rise of Modern Mythology, 1680-1860*. Bloomington: Indiana UP, 1972. Print.
- Guerber, H. A. *Myths and Legends of the Middle Ages*. New York: Dover, 1993. Print.
- Jones, Prudence, and Nigel Pennick. *A History of Pagan Europe*. London: Routledge, 1995. Print.
- Kingsley, Charles. *The Heroes; Or, Greek Fairy Tales for My Children*. 1856. New York: Macmillan, 1885. Print.
- Merriman, James Douglas. *The Flower of Kings: A Study of the Arthurian Legend in England between 1485 and 1835*. Lawrence: UP of Kansas, 1973. Print.
- The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989. Print.
- Pochoda, Elizabeth T. *Arthurian Propaganda: Le Morte Darthur as an Historical Ideal of Life*. Chapel Hill: The U of North Carolina P, 1971. Print.
- Segal, Robert A. *Myth: A Very Short Introduction*. 2nd ed. New York: Oxford UP, 2015. Print.
- Taylor, Beverly, and Elisabeth Brewer. *The Return of King Arthur: British and American Arthurian Literature since 1800*. Cambridge: D. S. Brewer, 1983. Print.
- Varagine, Jacobus de. *The Golden Legend*. Ed. F.S. Ellis. New York: AMS, 1973. Print.
- キャンベル、ジョーゼフ『千の顔を持つ英雄』新訳版（上・下）、倉田真木・斎藤静代・関根光宏訳、早川書房、2015年。
- シュール、Pほか編『神話の系譜学』野町啓ほか訳、平凡社、1987年。
- バーチェフスキー、S・L『大英帝国の伝説——アーサー王とロビンフッド』野崎嘉信・山本洋訳、法政大学出版局、2005年。
- 平藤喜久子『神話学と日本の神々』弘文堂、2004年。
- フライ、ノースロップ『世俗の聖典——ロマンスの構造』中村健二・真野泰訳、法政大学出版局、1999年。〔Frye, Northrop. *The Secular Scripture: A Study of the Structure of Romance*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1976.〕
- ブルフィンチ『中世騎士物語』野上弥生子訳、岩波書店（文庫）、1942年。
- ペティグリー、アンドルー『印刷という革命——ルネサンスの本と日常生活』桑木野幸司訳、白水社、2015年。
- 吉田敦彦・山崎賞選考委員会『神話学の知と現代』河出書房新社、1984年。
- 吉田敦彦・松村一男『神話学とは何か』有斐閣新書、1987年。
- リトルトン、C・スコット、リンダ・A・マルカー『アーサー王伝説の起源——スキタイからキャメロットへ』辺見葉子・吉田瑞穂訳、青土社、1998年。

映像資料

First Knight. Dir. Jerry Zucker. Perf. Richard Gere, Julia Ormond and Sean Connery.
1995. Sony Pictures Entertainment, Inc., 2004. DVD.

King Arthur. Dir. Antoine Fuqua. Perf. Clive Owen, Keira Kightley and Ioan Gruffudd.
2004. Buena Vista Home Entertainment, Inc., 2005. DVD. [劇場公開版]

Kingsman: The Secret Service. Dir. Matthew Vaughn. Perf. Collin Firth, Michael Caine
and Taron Egerton. 2014. KADOKAWA and Sony Pictures Entertainment, Inc.,
2015. Blu-ray.

ウェブページ

Child, Ben. "Is Guy Ritchie the Right Director for the King Arthur Epic?" *The Guardian*.
Guardian News and Media, 2014. Web. 09 Feb. 2016.
<<http://www.theguardian.com/film/2014/jan/31/guy-ritchie-right-director-king-arthur-epic>>.

Rossetti, Dante Gabriel. "1982,0619.23" British Museum. Web. 09 Feb. 2016.
<www.britishmuseum.org/collection>

"Aims and Scope." *Journal of Neo-Victorian Studies*. Web. 09 Feb. 2016.
<<http://www.neovictorianstudies.com/>>.

"Knights of the Roundtable: King Arthur." IMDb. IMDb.com. Web. 09 Feb. 2016.
<<http://www.imdb.com/title/tt3496992/>>